



Title	有島武郎「カインの末裔」小考：仁右衛門像の読み直しのための試論
Author(s)	申, 智淑
Citation	語文. 1999, 72, p. 18-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

有島武郎「カインの末裔」小考

——仁右衛門像の読み直しのための試論——

はじめに

「カインの末裔」は大正六年七月『新小説』に発表された。発表直後から賞賛的であれ、批判的であれ、文壇の注目を集めたこの作品は現在に至るまで様々な角度から論じられてきた。ところで、仁右衛門像の把握についていえば、同時代以来、一定の幅をもつ枠内で多様化してきたように思われる。つまり、同時代評における仁右衛門を捉えるキーワードを見れば、「野蠻」、「原始」、「自然」が多く、近いものには「非文明的人物」があり、そのほか「非常人」、「生きた農民」¹⁾という言葉が使われているが、戦後の論においてもその人間像の核心を語る言葉の主流は様変わりしない。上杉省和氏は昭和五七年、戦後の「カインの末裔」論を網羅してその捉え方を三つに分類整理した。²⁾「(一)、農民(小作農)を描いた客観的写真小説としてとらえる立場(二)、自然人(原始人、野蠻人)の社会に敗北してゆく悲劇を描いた観念的小説としてとらえる立場(三)、主人公に仮託した作者の自己告白小説としてとらえる立場」³⁾。ところがキーワードでいえば、上杉氏の分類した区分を越えて、同時代のキーワード

に加え、それをより具体化したといえる「本能」、「衝動」、「野性」、「欲望」という言葉のいずれかが使われており、仁右衛門の本質、つまり仁右衛門を動かしているものの捉え方においては同時代の枠組みを出ない。

ところが仁右衛門の造型にはこうした枠内にははまらない、重要な要素がある。それを明らかにするため本稿では、仁右衛門の激烈な行為に注目を奪われて十分な注意が払われていない、仁右衛門の内面、特に一見目立たない言動に潜む内面の消息に注意を払い、仁右衛門像の考察を進めたい。また、この作品は、「坑夫」、「土」、「重右衛門の最後」との比較を除いては、あまり外側から照らされることがなかったが、同時代の農民を描いた作品を広く射程に入れて考察を進め、仁右衛門のような農民を造型したことの意味、さらに同時代における独自性を明らかにしたいと思う。

一 仁右衛門の「おびえ」について

1 予告としての第一章の「おびえ」

本節で「おびえ」に注目する理由は、まず第一章のそれが仁右衛

申^{シン} 智^チ 淑^{シュ}

門の内面の世界を窺う手掛かりになるからである。また、「おびえ」は作品全体を貫く一つの軸になっていると考えられるからである。

「おびえ」と「恐怖」を軸に「カインの末裔」を読むと、仁右衛門は「一種のおびえ」を抱いてK村の松川農場に入るが、その後事態は逆転し、彼の方が村人に「恐怖を播」く存在となり、退場を迫られるようになる。四面楚歌の状況から逃れるため、彼は場主のところへ直談判に出かけるが、函館の街並みを見ては「動ともするとおびえ」てきて萎縮し、場主の邸宅では、その暮らしふりと権威に圧倒され、恐れに打ちのめされる。そして、農場を去っていくという結末を迎える。つまり、おびえという角度から、作品の大まかなプロットが辿れるほど、恐怖の感情が、作中の要所要所に顔を出しており、仁右衛門像および作品全体を捉えるうえでキーワードとして機能しているのである。では、おびえが描かれている最初の場面を見てみよう。

市街地のかすかな灯影（略）彼れはその灯を見るともう一種のおびえを覚えた。（略）敵が眼の前に来たぞ。馬鹿な面をしてゐやがつて、尻子玉でもひつこぬかれるな」とでも云ひさうな顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帯をしめ直した。（二）いきなり主人公の負の感情「おびえ」が出現するこの箇所は、これまで議論の対象となり、おびえの原因についてさまざまな解釈が提示されてきたが、作品に即して言えば、仁右衛門の心中を推察する語り手の言葉にもっと注目すべきと思う。その意味内容はこの後描かれる仁右衛門の行動および作品の展開とも、深く関わっているからである。まず、仁右衛門に恐怖心を呼び起こした市街地の灯が彼には、これから入っていくこうとする人間の社会、具体的にいえば

松川農場の象徴として映っていることは、間違ひなからう。そして「敵が」以下の部分は後続の内容から単純に考えると、妻に注意を促したいという心情を表しているといえよう。しかしそれより重要なことは、この言葉の背後から読み取れる仁右衛門自身の認識の方であろう。つまり作者はここで、仁右衛門が人間の社会を弱肉強食の相敵対する世界として認識していることを示していると考えられる。さらに作品の中にはこれと密接につながっている仁右衛門の行動様式が描かれている。彼は人前では自分の弱さや惨めさを曝さない人物として造型されているのである。

人間の弱さがあらわに出るのは、予期せぬ惨事に遭遇した時であろう。仁右衛門の場合、赤ん坊の死と馬の事故がそれに当たろう。ところが、赤ん坊が死んだ時、彼が「頑童の如く泣きをめ」（五）くのは、彼の周りに妻以外には誰もいない、村の共同墓地の上でのことであつた。また、馬から転落した時も、彼は「氣丈にも転りながらすくと、起き上」（六）がるのだが、人の群に取り囲まれると、骨折した馬の処置は蹄鉄屋に頼んで人の群がる競技場から出てしまう。彼の馬に対する執着を考えると、この行動から、馬への愛着以上に強く、彼を突き動かしているものがあることが読み取れる。すなわち、仁右衛門の内にある、自分の惨めな姿を人前に曝したくないという欲望である。さらに、事故のあつた日、仁右衛門が頭を垂れたまま「互に憐れむ」（六）ような姿を見せるのは、痛ましい格好をしている馬の前だけであることも見過ごせない。人前ではあくまでも居丈高な、狂暴な彼である。甚だしくは、場主への働きかけを思い立った時もその方法は「一喧嘩」（七）であつた。こうした仁右衛門の行動の特徴の根源とも言えるのが、実は一章で語り手が見て取っ

た彼の認識、即ち、人間の社会は弱肉強食の相敵対する世界、という認識なのである。この認識が人間社会に向かう仁右衛門をおびえさせ、一方では、その社会の中で生き抜くための知恵、自分の弱さを人に曝さないというのを生みだしている。仁右衛門の内面のおびえと狂暴な行動の特徴は表裏一体のものとして仕立てられている。

ところが、もし仁右衛門が渡り者として社会の周辺を生き続けるなら、たとえそのような社会認識を持っていても、社会におびえなくて済んだかも知れない。有島武郎の云うロープファーの自由という可能性もあろう。また、同時代の文学を眺めても、渡り者の労働者というのは、労働者の中でも一段と世間構わずの放埒な者、または凶暴で捨て鉢的な生活を送る者として描かれていて、恐れるよりは恐れられる存在と言った方が適切であるからである。しかし、仁右衛門は一角の自作農となり、妻に「絹の衣装を着せて」、自分は「帽子を被つて二重マントを着」る未来を思い描いている。この即物的な通俗的な夢が、一歩間違えば自分の方が倒されるかも知れない人間の社会に身を置かせるのである。

しかし、これらのことは後の展開の中で明らかになる仕組みととなっている。つまり、最初に引用した第一章のおびえは予告的機能を果たしているのである。第三章で仁右衛門の夢が明らかになり、四・五・六章で、他人に自分の弱さを見せない仁右衛門の行動の特徴が描かれ、最終章の七章に至ってはじめて、仁右衛門の社会認識通りの事態が現実となり、いよいよ仁右衛門はおびえの本命の対象、場主と対決するようになるからである。ちなみに、二章ではおびえは姿を隠し、後述するが、その対極にあると言える仁右衛門の自負の方がはつきりと出てくる。

2 現実化する「おびえ」

「まだか」、この名は村中に恐怖を播いた」で始まる七章に至ると、仁右衛門には「人間がよつてたかつて彼れ一人を敵にまわしてゐるやうに見え」てくる。つまり、「敵が眼の前に来たぞ」(一)が現前するのである。そして、仁右衛門の内面に潜伏する敵意やおびえも再び作品の表面に顔を出す。

彼れは汽車の中で自分の云ひ分を充分に考へようとした。然し列車の中の沢山の人の顔はもう彼れの心を不安にした。彼れは敵意をふくんだ眼で一人々々睨めつけた。函館の停車場に着くと彼れはもうその建物の宏大もないのに肝をつぶしてしまつた。

(略) 然し彼れの誇りはそんな事に負けてはゐまいとした。動ともするとおびえて胸の中ですくみさうになる心を励まし、彼れは巨人のやうに居丈高にのそりと道を歩いた。

敵意とおびえ、おびえに立ち向かおうとする内面の姿勢は明らかに第一章のおびえの場面と呼応している。そしてここには、おびえを制するのは誇りであることが明らかになっている。ところが、仁右衛門が見も知らない人々に対して敵意を抱くというのは、五章の居酒屋の場面で「一緒に飲んであるものが利害関係のないも彼れには心置きがなかつた」という記述と一見矛盾する。しかし五章での仁右衛門は百円もの大金が懐にあつた強者であつたが、現在の彼は自分一人が村中から敵視され、疎外されていると感じる弱者であり、この敵意は村でのその延長線にあるといえる。一方、函館の街はこれから仁右衛門が訪ねていく函館の場主の富みの前触れであり、それにおびえる姿は場主の前で完全に萎縮してしまう仁右衛門の姿の前触れとして描かれていると考えられる。

ところで、この箇所を田舎者の都会に対するおびえという題材として撰取している作品がある。有島の推薦で文壇にデビューした野村愛正の「保安林盗伐」(大正七・四)がそれである。この作品は炭焼きを渡世としている山間の村人の都会への憧れと、村を離れられない心理を描いているが、中に次のような叙述「その広い世間といふことと、其処には多数の人の群があるといふことが、本能に近い恐怖と含羞とを与えて、残らず村に居居つて了つて居るのであつた」とか、「広大な白亜の建物の中に入つて行くのが怖しかった」という、「カインの未裔」の引用部と似通つた叙述が見える。しかし性格の造形には明確な違いがある。「保安林盗伐」の村人には、自分は「人中に出て二人も三人も養つていくだけの甲斐性がある」という自信はなく、彼らにとつて都会生活は空想に過ぎず、現実的には恐怖の対象ではない。それに対して仁右衛門は、「然し彼れの誇りは」云々とあるように、己を奮い立たせ、「おびえ」を制御する誇りをもっている。おびえを制して農場に入り、自作農という成功を夢見てきた所以である。ところが、仁右衛門の内面の「誇り」と「おびえ」の力学関係はひっくり返される。それが場主との対面場面である。仁右衛門とは隔絶した富みを背景にした場主の「権威」の前で、仁右衛門の誇りは跡形もなく姿を隠し、彼はただ恐れに打ちめされる。この内面の変化が、「仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、不器用な足どりで(略)場主の鼻先きまでのそり／＼歩いて行つて出来るだけ小さく窮屈さうに座りこんだ」(七)という動作に形象化され、場主に会う前の「巨人のやうに居丈高」な歩きぶりと痛ましいほど完璧な対照をなしている。第一章の予告としてのおびえは最終的にここに収斂するわけである。しか

し、仁右衛門の誇りが完全に失われたのではなく、また、退場はおびえからの逃避なのではない。これについては次章で考察する。

一方、同時代の小説を視野に入れて見ても、小作農というのはおびえやすい弱者として捉えられている。例えば「土」(明治四三・六・一三)、「一・一七」(東京朝日新聞)の勘次や、小川未明の「小作農の死」(大正六・六「新小説」)の要助がそうであり、真山青果の「南小泉村」(明治四二・八「新潮」)にも「雨を畏れ、風を畏れ、害虫を畏れ、日として自然の威圧に戦かぬ日とは無く、(略)一生を自然の前に跪づくの外に、かれらには仍ほ跪づくべき地主がある」という言説がみえる。しかしこれらの作品に描かれている農民の恐れは、定住小作農としての長い経験から生まれた習性的なものである。それに対して、渡り者の仁右衛門のおびえは、敵同士という社会観に起因し、その社会で農民として成功しようとする夢あつてのおびえであり、他の作品と一線を画す。しかし場主の前で萎縮する仁右衛門のありさまは、一度しか描かれていないが、農民のおびえの典型的な例ともいえよう。

二 仁右衛門の自負について

1 「誇り」の表象と根拠

前章で触れたように、最終章には、仁右衛門の内面においておびえを制する誇りが明確に描かれている。勿論仁右衛門の誇りは周囲の人が認めるようなものではなく、ましてや社会的、公的根拠のあるものではない。これから發揮しようとする自分の力への自らの信頼による、つまり極めて主観的なものである。他人から見た彼は、「馬鹿な面をしてゐる癖に油断のならない横紙破り」(一)、「自

然から今切り取つたばかりのやうな「男（七）」なのである。しかし、人の中で生きざるを得ない仁右衛門にとって、自我の支えとなつてゐる誇りは、仁右衛門像を捉えるとき決して無視できない側面である。

作者は仁右衛門の誇りを、それが傷つく場面から描き始める。次は松川農場の事務所始めて帳場に出会う時の仁右衛門の様子である。

人間の顔——殊にどこか自分より上手な人間の顔を見ると彼れの心はすぐ不貞腐れるのだつた（略）彼れは辞儀一つしなかつた（一）

自分よりどこか優越な人間に出会うとすぐ反発を覚えるというのは、裏を返せば、他人の優越を一切認めたくないということになり、不合理な心理である。しかし、これが作者によつて仕立てられた仁右衛門の性格であり、右の引用に描かれているのは、仁右衛門の過剰な誇りの逆説的な現れである。また、辞儀をしないという行為はこうした仁右衛門の誇りの単純かつ粗野な現れと考えられるが、次はそれについて述べたいと思う。

辞儀をしない、頭を下げないという仁右衛門の振る舞いは、この後も反復して描かれ、仁右衛門の誇りの表象として、仁右衛門像を形づくる一つのモチーフとなつてゐる。具体的にいえば次の四箇所である。笠井に道を教えてもらつて、「挨拶一つせずさつさと別れて歩き出した」（一）という場面。入場した翌日帳場が川森を伴つてやつてきた時、仁右衛門は自分が挨拶しないのは勿論のこと「恐る／＼頭を下げ」る妻を見て、「かつと唾を吐」き、不快感をあらわにする（二）。また、川森には「汝や辞儀一つ知らねえ奴の、何

條云うて俺らには来くさらぬ。」（二）と文句を言われ、場主には「而して辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い、馬鹿」（七）と言ひ渡される。辞儀をしないのが、相手に対する単なる生理的反発でもなければ、世知に疎い事の証拠でもなく、仁右衛門の誇りの現れであることは、次の所を見ると明らかである。

今にな俺ら汝に絹の衣装を着せてこそぞ。帳場の和郎（彼れは所きははず唾をはいた）が寝言べこく暇に、俺ら親方と膝つきあはして話して見せるかな。白痴奴。俺らが事誰れ知るもんで。（二）

これは第三章に出てくる「未来の夢」と呼ぶ内容で、ここには仁右衛門の自負がストレートに表現されてゐると同時に、その自負を支えているのが彼自身の未来像であることが明らかになつてゐる。仁右衛門は心中では未来の自分を場主と同格に置き、帳場や笠井などは自分の相手にはならない人間と見下しているのがわかる。よつて現実的には笠井と帳場が優位にあつても、頭を下げるなど彼にとつては、もつてのほかなのである。右の述懐から、辞儀をしないのは仁右衛門の屈折した誇りの表れ、と読ませようとする作者の意図がみえてくる。

それでは一步踏み込んで、仁右衛門の誇りはいったい何に根拠があるのであらうか。結論を先にいえば、金銭をもたらす身体力といえるが、これもまた仁右衛門自身の言葉から観取される。

「白痴なことこくなれば、二両二貫が何高いべ。汝たち骨節は稼ぐやうには造つてねえのか。（略）俺れその公事には乗んねえだ。（三）

笠井の頼み（小作料の値下げ要請への協力）を断る仁右衛門のこの

言葉には自分の労働能力への自信が露骨に表れている。勿論笠井への反発、夢の実現の手応えによる親方への心理的肩入れもこの拒絶の背後にはあろう。実際仁右衛門は、驚くべき体力と勤勉さを併せ持っているし、「汝たちが骨節は云々というだけあって、大金の収入を得たこともある。彼は強靱な体力が金をもたらし、自分の誇りの客観的根拠となる夢の実現を可能にすると思っているわけである。つまり、仁右衛門の誇りの背後には、体力—金銭—夢、という連鎖関係があるのである。

ところが、仁右衛門の誇りを作者は卑小なものとして描く。つまり作者は、仁右衛門の誇りの背後にある金銭への執着、物質主義そのものを、次のようにならぬ突き放して描き、また、驕りという、誇りの逸脱した負の側面も描いている。

夫婦きりになると二人は又別々になつてせつせと働き出した。

(略) 仁右衛門は然し元氣だつた。彼れの真闇な頭の中の一段高い所とも覺しいあたりに五十錢銀貨がまんまるく光つて如何しても離れなかつた。彼れは歎を動かしながら眉をしがめて夫れを払い落さうと試みた。然しいくら試みても光つた銀貨が落ちないのを知ると白痴のやうにつつたりと一人笑ひを漏らしてゐた。(二)

金銭の魅力の虜になっている仁右衛門の様子が戯画化されており、滑稽そのものである。「頭の中の一段高い所」云々という皮肉は、仁右衛門にとつての金銭の重みを示唆しているといえよう。七章の函館の街の場面で、「その一本の柱にも驚くべき費用を想像した」と、建物をすぐ金銭に換算していることもこれと呼応する。また作者は、夢の実現が順調にいつているとみえると、彼の自信は、誇りを通り

越して驕りの相を呈することも描いている。「仁右衛門はあたり近所の小作人に対して二言目には喧嘩面を見せた」(三)とあるのである。

そもそも仁右衛門の誇りには過剰という問題があるのだが、それが笠井や帳場を相手として描かれる時は、現実的には仁右衛門が劣位のため、読み手には肯定的に受け取られる。また、仁右衛門の誇りに対する語り手の思い入れも窺われる。語り手は、函館の街並みに驚く仁右衛門が、「そんな事に負けてはゐまい」とする誇りに励まされて歩く様子を、「巨人のやうに」(七)と表現する。また、赤痢で死にかかる赤ん坊に笠井が呪術的な治療を施すのを、仁右衛門がさすがの気持で見つめている場面にも注目したい。語り手はその様子を、「おぞましくも拌むやうな眼で笠井を見守つた」と反発を込めて描いている。笠井などの前に誇りを抛つた仁右衛門への語り手自身の反発、裏を返せば、仁右衛門の誇りへの思い入れが観取される。つまり、語り手は仁右衛門の誇りに対して肯定と否定相反する二重のスタンスを取っていることになる。最終章において仁右衛門の誇りが、裁断されると同時に質的变化を遂げるのは必然の結果といえる。

2 裁断される驕り

驕りは相手によつては打つて変わつて卑下に変容するものである。その変容のドラマが描かれているのが、場主との対面の場面に他ならない。

仁右衛門の誇りは、場主の金銭の△権威▽の前でひとたまりもなく、挫かれ、彼はただ恐れおののく惨めな小作農に転落する。彼の誇りの根拠が場主の△権威▽と同じく物質にその核心があり、両者

は明らかに優劣關係に置かれざるを得ないからである。しかし、仁右衛門の「巨人」から「小さ」きものへの転落という反転は仁右衛門だけを裁断しているのではない。つまり、この反転には、仁右衛門のような農夫をも見る影もなく矮小化させる地主制度に対する作者の批判も込められている。契約書という抽象的な形で示された地主の力に対しては、「これだけの事で飯の種にありつけるのはありがたい事だ」(一)と思ったり、「糞を喰らへ」(二)とその規約を無視して平気だった、無知な彼であるが、眼を見張る程の物質の形で現れている地主の力にはただ恐れ入るばかりである。有島は、地主の富みが、小作農を卑下へと追いやり、抵抗心さえ起こさせないへ權威Vへと変貌する理不尽、恐ろしさを、仁右衛門と地主との対面の場面を通して見事に原初的な形で形象化して見せている。

それでは、仁右衛門の誇りは完全に失われたのか。そうではない。次の節を読むと、仁右衛門の誇りは深手を負いながらも息づいていることが窺われる。

「馬鹿」その声は動ともすると彼れの耳の中で怒鳴られた。何といふ暮らしの違ひだ。何といふ人間の違ひだ。親方が人間なら俺れは人間ぢやない。俺れが人間なら親方は人間ぢやない。

彼れはさう思つた。而して唯呆れて黙つて考へこんでしまつた。

「馬鹿」と言われながら恐れ入らざるを得なかつた自分と權威に満ちた地主との差異、そして暮らしの差異、という発見は仁右衛門にとって強い衝撃であつた。しかし彼は、木下尚江作「良地の自白」

(明治三七く三九)に出てくる小作農与三郎のように、田地は「天頭様」のもの、という認識を持つていてもないし、無学なので、与三郎のように地主の搾取について辛辣に批判することも出来ない。

無知な仁右衛門は自分が感じる圧迫感と地主との生活の違いの不当さを理路整然と表すことは出来ないのである。しかし、「呆れて」という言葉からも彼が両者の落差を抵抗なく受け入れていないのは明らかである。またこの箇所は、同じく支配者对被支配者という対立の構図を持つ「かかん虫」の中でヤコフが、支配者「人間」が自分たち労働者を「虫」と侮蔑することについて、「虫たあ何んだ……出来損なつたつて人間様は人間様だらう」と言っている所と響き合っているように思われる。傍線を引いた仁右衛門の内的独白は方向としては、「しかし本当は同じ人間ぢやないか」という自問に向かうのではなくるのか。退場という選択もそれを裏付けると思われる。

場主は退場を命じてはいない。従つて、仁右衛門が自作農になる夢に執着するなら、農場に留まれないこともない。しかし、農場に残るといふことは、地主がその支配者であることを思い知つた以上、場主の命令に従ふことを意味する。ところが、その命令、「来年からは魂を入れかへろ。辞儀の一つもする事を覚えてから出直して来い、馬鹿」の意味は重い。なぜなら、辞儀をしないのは仁右衛門を支えている誇りの表象、ということ想起すると、地主の言葉は仁右衛門のありようの根本的な変革、それこそ魂の変革を命令するものに他ならないからである。つまり、誇りの代わりに卑下あるいは、面従腹背の護身に生きる多くの小作農の群に同化することを仁右衛門は要求されているのである。

しかし仁右衛門は農場を去る。仁右衛門の物質主義的な誇りは場主の前で消失した。しかし、仁右衛門の目覚めかけた、他への屈従をよしとしない人間そのものに備わっている誇りは、たとえ夢のためとはいへ、屈従的な生を己に強いることを拒んだのだと考えられ

る。つまり退場という結末には、彼が自分の誇りを放棄しないと
う、積極的な意味が暗示されているように思われる。漂浪の旅のつ
らさを思いだして泣き出す妻を、仁右衛門は「意外にも」叱りつけ
ない。以前は強者であることを誇りにした彼の内面に変化が起こっ
たことを窺わせるものといえよう。

3 同時代作品からみた位置づけ

以上の考察から、仁右衛門の誇りは彼にとつて内的支柱であり、
またそれは質的变化を遂げているのが暗示されていることが明らか
になった。ところでこういう仁右衛門像は、同時代の作品の農夫像
と比較すれば、異彩を放っている。例えば、「南小泉村」を引き合い
に出してみよう。

渠等の根性の卑吝は云ふ迄も無いこと、改めてこゝに云はぬに
しても、渠等がいかに訴訟上手な事も、僕には厭悪の一つと
なる。(略)その上べんちやらの巧いこと。朴訥らしい重い口を
動かして、町の人には気が射して云はれぬお世辞を、平気でツ
ケ〜云つて、自尊高い城下の衆を巧に喜ばせて居る。人には
鉅々の矜さへ無ければ、どんなにでも相手を喜ばすことが出来
るものだ。(第一)

右の内容は、お辞儀はしない、訴訟は下手、の仁右衛門とは対照的
な笠井、或いは、宮本百合子作「貧しき人々の群」(大正五・九『中
央公論』)に出てくる、お世辞上手の貧乏農民たちを連想させるもの
である。誇りどころか品性の卑劣さが特徴として捉えられているの
が分かる。

また、藤村の「千曲川のスケッチ」⁽¹⁶⁾や、久米正雄の「阿武隈心中」

(大正五・一〇『新思潮』)等に描かれている農民の場合は、卑劣さ
は見受けられないが、誇りとは縁の遠い卑下や諦念が窺われる。前
者の中に出てくる百姓の隠居は「お百姓なぞは、能の無いものの為
るこんです……」(「農夫の生活」)と自嘲の言葉をこぼし、「阿武隈
心中」に出てくる老農夫は、「土に噛ぢりついて水箸ばつかし食つて
ゐるよりか、町へ出れぬ煙草専売所で一日八十銭取れる時世だもの
(略)時世がおらだけ取りのこして、ぐんぐん行つちまつたんだ。

おらにあまりう用は無えだ。」と諦念の思いをあらわにする。⁽¹⁶⁾一方、仁
右衛門と似て非なる形象をされているのは、島崎藤村の「藁草履」
(明治三五・一一『明星』)の主人公源吉である。藁草履とあだ名さ
れる若い農夫源は、強靱な体力に恵まれていて、「慥慥」だという点
では仁右衛門と共通点をもつが、源の特徴として描かれるのは功名
心、尊大さである。

功名心の深い源は、其日の競馬の催に野辺が原附近の村々から
集る強敵を相手にして、暗の勝負を争ふ意気込でした。最後の
勝利、無上の栄誉、などを考へて、昨夜はおちおち眠りません。
(略)そここゝと馬を引廻して、碌々観相も弁へない者が「そ
いつたつても、まあ良い馬だいなア」とでも褒めやうものなら、
それこそ源は人を見下した目付をして、肩を動つて歩く。

功名心に浮かれています様子、人の褒め言葉に思い上がりやすい軽薄
な性質が滑稽に描かれている。仁右衛門の方も、競馬に出て馬を褒
められると、「いゝ気持ちになつて、いやでも勝つて見せるぞと思つ
た」とあるので、功名心がないわけではない。しかし、彼の支えと
なったり、彼を思い上がらせたりするのは、誇りであり、自信であ
つて、人の賞賛ではない。それに対して源は、「尊大な源の生命は名

誉です。その名譽が身を離れたとすれば、残る源は——なんでせう。自分で自分を思ひやると、急に胸が込上げて来て」とあるように、自らへの信頼や誇りはなく、人の賞賛に拘泥する「凡夫」なのである。⁽¹⁷⁾最後に、「自分の欲する俛、則ち性能の命令通りに一生を渡つて来た」、「放恣なる自然の発展を人に示」した「自然児」という、「重右衛門の最後」(明治三五・五)の主人公をよこにおいて見ると、重右衛門と仁右衛門とは、自他破壊的衝動へと自己を駆り立てる劣等感⁽¹⁸⁾と、夢の実現へと自己を奮い立たせる誇り、という明確な違いが認められ、仁右衛門を自然児と捉えた場合にもその在りようを同時代文学の中で相対化する際には「誇り」は重要な意味をおびてくる。

おわりに

以上、仁右衛門を動かす重要な内面的要素と思われる、「おびえ」と「誇り」に注目し、それがどのように描かれ、作品の展開に関わっているのかを考察した。「カインの末裔」のドラマは仁右衛門の意識の側面から見れば、「おびえ」と「誇り」が拮抗しているドラマであり、作品は「誇り」の質的变化を暗示して終わっている。仁右衛門は物質主義的誇りを支えていた通俗的な夢を放棄し、他への屈従を拒否するという人間本然の誇りを選んだ。このことは従来あまり言われなかったが、この作品のヒューマニズムの性格を物語る。また有島は、仁右衛門と地主との対面の場面を通して、資本主義に庇護されていた地主制度の問題性を告発した。しかしリアリズムの小説と読む場合、限界も指摘できる。仁右衛門の救済が屈従を拒む誇りという個人の人格的次元においてなされることにより、それ以上

社会的問題として追究されないし、⁽¹⁹⁾また、別の機会に論じたいと思うが、仁右衛門の夢を、「奇跡の護符のやうな」との比喩表現で「夢想」のごとく暗示しているのは時代状況の的確な反映ではないからである。とはいうものの、同時代小説の中の農民の在りようが、卑劣さや狡猾さ、あるいは卑下や諦念を特徴としていることを考えると、おびえと拮抗する誇りを仁右衛門の造型の根幹に据えていることは、同時代の農民像を相対化すると同時に、下層に生きる人の人間性回復への願いも感じられる。野性、自然、本能という側面にだけ注目しては「カインの末裔」に対する正当な評価は下せないとと思う。

注

- (1) 出典は紙面の関係上省く。注(2)の論文を参照されたい。
- (2) 「カインの末裔」研究史ノート(「常葉国文」昭和五七・六)
- (3) 傍線は引用者。以下の引用の傍線も同じ。有島の作品および文章からの引用は筑摩書房の全集(昭和五五年)に拠り、漢字の旧字体は新字体に改めた。以下、他の引用における漢字も同じ。
- (4) 「文明に怯える仁右衛門の野人的特徴」とする吉田俊彦氏(「カインの末裔」考、「岡山大学教養部紀要」平成二・七)の指摘など。
- (5) 「農場でも鉱山でも飯を食ふ為めにはさう云ふ紙の端に言判を押さなければならぬといふ事は心得てゐた(一)」ということや、「妻は良人の心持ちが分ると又長い苦しい漂浪の生活を思ひやつて(七)」という叙述が仁右衛門の渡り者の経歴を端的に表している。
- (6) 例えば、三島霜川「悪血」(「新小説」明治四〇・六)。「わたり者の労働者は、銭を得るまぐに、酒を飲む、賭博をやる、女を購ふ、処女を辱める、人妻を殺す、喧嘩をする、放逸横暴、傍若無人の振舞に沿道の安寧を擾乱するのであつた。(略)彼等を取つては人の道とか体面とか、または善とか悪とかいふことは何んの意味も無ければ価値も無い。(略)社会は余り多く彼等を眼中に置いて居らぬが、彼等もまた社会を何んとも思つてゐない」
- (7) 江馬修の「なまけもの」(「早稲田文学」明治四五・六)の主人公等。

(8) 例えは「土」の勸次は渡り者の労働者を次のように恐れる。

「勸次はそれから復た利根川の工事へ行かねばならないと思つて居た。それは彼が僅の間に見た放浪者の怖ろしきと思つて、仮令どうしても其統領を欺いてその僅少な前借の金を踏み倒す程の料簡が起されなかつたのである。その内に帳元から葉書が来た。彼は只管恐怖した。」引用は『長塚節全集』(昭和五二年、春陽堂)第一巻(五)に拠る。

(9) 野村愛正は大正五年、「同人誌を介して有島に知られ、その推薦により『太陽』に「土の霊」(大正七・一)、引き続き、『文章世界』に「保安林盗伐」を掲載している。『日本近代文学大事典』に拠る。

(10) 「土」の方だけ引用する。「貧乏な小作人の常とは尋常ではない(五)怖心に襲われている。殊に其の地主を憚ることは尋常ではない(五)」

(11) この場面でも結局仁右衛門は「辞儀もせずに夢中で立上」がる。ただ、この場合辞儀をしないのは、気が動転していることの現れと読むのが適切であろう。しかし、これで仁右衛門は作中一回も辞儀をしない。辞儀をさせたくないという作者の思い入れが感じられなくもない。

(12) 外尾登志美氏は、『有島武郎』「個性」から「社会」へ(平成九・四)の中で場主のもつ「文化の力」が仁右衛門の「人間本来の力」を「威圧し、萎縮させてしまった」とし、両者の力の異質性を説くが、物質性という共通性こそ仁右衛門の敗因がある。

(13) 例えは次のようなところ。「何かと言へば小作人くゝと見下げやがる、一体誰のお陰で贅沢な真似して居るのだ。泥棒め——沙一粒でも糶一粒でも、貴様達の手に来たものがあるだか」「良人の白自」上篇(六)引用は『木下尚江全集』(一九九〇年、教文館)第二巻に拠る。

(14) 例えは次のような箇所。「大の男がたつた五円の金を貰おうとして、幾度お辞儀をし、哀れみを乞うたことか! (略) 愚にもつかない贅辞を呈せられたり、おだてられたりするのを、別にどうしようもなく、どうしよう力もなく、聞いてすました様子をしている」引用は『宮本百合子全集』(一九八二年、新日本出版社)第一巻に拠る。

(15) 明治四四年六月から大正元年八月まで『中学世界』に断続的に掲載された。引用は『島崎藤村全集』(昭和二十四年、新潮社)第三巻に拠る。

(16) ところで興味深いことは、「阿武隈心中」の老農夫の言葉からも分かるように、これらの作品において、農民のさもしさや卑下、諦念と分けるが、盛況を誇っている町、つまり産業化の進む都会と田舎との落差から生まれていると捉えられていることである。仁右衛門の誇りが函館の町に住む場主の權威のままで挫かれたことを思い起こせば、農民を矮小化

させる都会という側面は共通しているように思われる。

(17) ちなみに、源の父親も若い時は源と同じであつて、とうとう村にも居られないようになったが、「漸と目が覚めて心を入替えたそうだ。原の未来像の可能性のある若き日源の父親の改心は、場主の命令通り心を入れ替えようとはしない仁右衛門とは対照をなすのである。

(18) 語り手は破壊的衝動に駆られる重右衛門の心理を次のように描く。

「親が憎い、己を不具に生み付けた親が憎い。となると、(略)口惜しくつて、忌々しくて、出来るものならば、この天地を引裂いて、この世の中を闇にして、それで、自分も真逆様にその暗い深い穴の中に落ちて行つたなら、何んなに心地が快いだらうといふやうな浅ましい心がある。」「重右衛門の最後」の(八)。引用は『日本近代文学全集』(角川書店)第一九巻に拠る。

(19) 有産階級である有島は「現実的に解決の方向を追究する」ことができず、「万事は宿命にすり代わつてしま」つた。「仁右衛門に放浪を選ばせたのは作者である」(『カインの末裔』私論)『立正女子大園文』昭和五〇・三とする江種満子氏の指摘は部分的には賛成する。

(20) 拙稿『有島武郎「カインの末裔」における仁右衛門の夢について』(『解釈』平成一年七・八月号)を参照されたい。

—— 本学大学院博士後期課程 ——